出会い　ふれあい　助け合い

サロン・あべの

＜サロン・あべの＞NO．38　　平成　元年　8月13日（日）発行

サロン・あべの七月の出会い
私のコミュニケーション

梅雨明け宣言が聞かれるかと思われる程に、真夏日が輝やいた平成元年七月一五日（土）午後一時～四時、育徳コミュニティーセンター二階にある研修室に於て＜サロン・あべの＞の七月の集いが開かれた。

この日は、今年のメインテーマ『コミュニケーション』を参加の方々に自由にお話をしていただき、お互いにコミュニケーションの輪を大きく広げていただこうと、題して――あなたが主役――。

サロンでのコミュニケーションは、もとより〃出会い、ふれあい〃から始まるので、自己紹介を兼ねてそれぞれの趣味や日常生活のあれこれをお話していただいた。

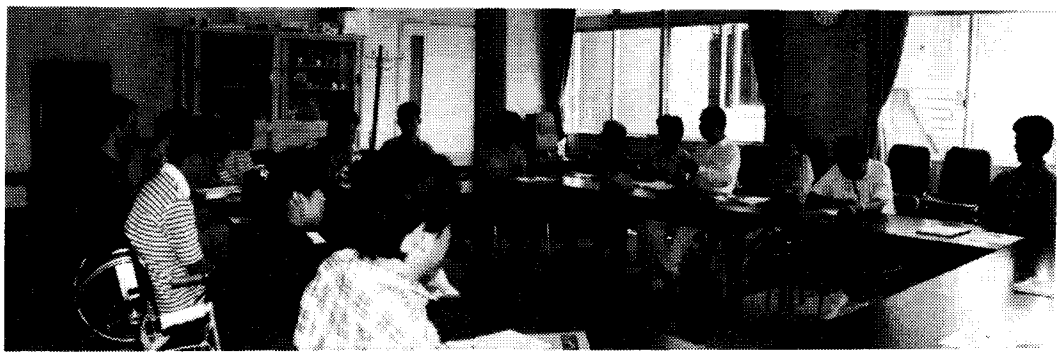
――あなたが　主役――

首が痛くて食欲もなく、一週間程寝込んでいたけれど、と元気な声で趣味の棒針編みの技術を習得して、将来は編物の講師になりたいと抱負を語るNさん。

コミュニティーセンターでの例会には初参加だけれど、こうしてお会いしてみると顔見知りが多くてと、にこやかに話されるUご夫妻。長居の身体障害者スポーツセンターで、電動車椅子のサッカーチームに入り毎週ご夫妻で汗をながし、仲間との交流を楽しんでおられると言う。

毎週一回U氏のお風呂介護に都島から来ておられるM氏は、この日はUご夫妻と一緒の参加。

Uご夫妻とはサッカー仲間、サロンには発会式より参加のYさん。



出会い　ふれあい　助け合い　＜サロン・あべの＞7月の出会い

大正区よりいつも一人で電動車椅子参加のH氏は、サロンでは色々な人との出会いがいっぱいあって大変勉強になっている。又、他の文芸サークルにも参加して、最近は充実した毎日と元気に言われる。

住吉区のH氏は、いつものサッカー仲間が揃っているので、なんや　不思議な感じやな～と笑う。

電動車椅子でいつも参加下さる地元のKさんは、今日はコミュニケーションについて、勉強させてもらいたくて、前もって辞書で調べて来たんですよ。

最年長であろうかと思われるKさんは、いつも皆様と一緒に参加出来、大変勉強になっている。老後の生き方も考えさせられている。明るい皆様に会えるのがなにより嬉しいと。

T氏ご夫妻は、初めての参加。病気知らずだったご主人が脳こうそくの後遺症で言語障害と半身不随になり、家に閉じこもりがちになっているので、Kさんの紹介でお

トーキングエイドを日常生活用具に！

斉藤孝文

ボクは、重度のCPで言語障害者です。人の言葉はよく聞こえ、理解も人並み以上と自負していますが、音声で答えるとか、返事をするとが出来ません。

いつも、文字板の一字一字を指で差して相手に意志を伝えます。一対一で話をする時であれば、文字板を間にしてお互いの交流もスムーズに出来ますが、多人数の時、発言したい時、ボクの意志表示を察して文字板を見てもらうのは、なかなか大変です。

又、慣れていない人が文字板の一字一字を追いながら、ボクの言葉にして他の人に伝えることもしんどい仕事です。「エッ、ナニ？もう一度…」と聞かれると、頭の中でまとまっていた言葉が縮小して、まぁいいか…と思いに反して簡単にすますことも度々です。難しい言葉を使いたいのではなく、文節になっている言葉、自分の句・読点のある話言葉で、自分の言葉で皆さんと交流したいのです。

六月のサロンの集いでトーキングエイドのことを知り、これならボクにも使えると早速、福祉事務所へ申請に行ったら、日常生活用具でないから支給出来ないといわれました。ボクのような言語障害者には必需品と思えるのですが、どうして日常生活用具になっていないのかが不思議です。

緊急の時、人は大声で助けを呼び意志を伝えます。ボクの場合はどうしても、文字板に頼らねばなりませんので、時間と労力を要します。そんな時、トーキングエイド支給を希っています。

若い人の仲間入りをさせてもらいたいと思ってと、奥様の弁。

肢体障害なんのその、元気が取り得といつも張り切っておられるNさんは、お姑さんにも優しい肝玉カアチャン。

Yさんも、Kさんのご紹介で初めて参加下さった。脳こうそくになってステッキを使用して歩いているが、自分のことは何でも出来る。月に二、三回長居の身体障害者スポーツセンターのプールへ泳ぎにいっているとのこと。

東住吉区にお住いのH氏は、サロンでの活動を通して色々な方々に会い、ここには田舎的なコミュニケーションがあると感じた。学校や職場の友人等との交流と違うコミュニケーションがここにはある。色々な話が聞けて楽しい。多くの人の声を聞いて仕事（都市計画のコンサルタント）の面に生かしていきたいと思う。

南河内より来られたK氏は、忙しい中仕事とボランティアをうまく両立させ、充実した日々を送っているとのこと。

トーキングエイドの影武者N氏は、インタビュー記事（NO.37 P.4）の話や、体調を整えるためリハビリに通院している話を披露。

遅れて入ってきたU氏は、仕事で遅れて汗がドッ。スロープを車椅子で上ってきてまた汗がドッド、そして早速の自己紹介でドドッドと汗が出ましたとあかい顔。

藤井寺から久しぶりに参加のF氏は、U氏程の握力がないので、下に集っていた少年野球グループの子に声をかけてスロープを押してもらった。これも一種のコミュニケーションであり、少年は慣れない車椅子を蛇行させながらも快く手伝ってくれた。

サロン・あべのの目的は、多くの人達・地域等のコミュニケーションですとTさん。

あとのフリートオークでは、F氏の海外旅行での生活内容や外国の人とのコミュニケーションについての話を聞いたり、N氏・Kさんには隣り近所とのおつきあいや、日常生活内容、入浴に関する各々の体験等が話し合われた。特に入浴に関しては、欠くことが出来ない必須問題であり、浴槽に入れないある人は、四季を問わずシャワーですませているとのこと。それらの話を聞いて自分だけが寒い、詫びしい思いをしていたのではなかったことが解り、嬉しく思ったといわれた言葉が印象に残った。

参加者二〇名、司会は石田　律氏。

二誌に〈サロン・あべの〉が紹介されました

NHK　社会福祉セミナー七月～九月号「社会福祉の分野と対象」の中で、糀谷終一氏が〈暖かみのあるユニークなサロン〉と題して

ノーマリゼーションが叫ばれているなかで、障害者が中心となり、一般市民を参加させてのサロンが大阪市にある。

それは「サロン・あべの」という団体で、障害別はもとより、老若男女を問わず、だれもが参加できるように、会費なしの自由出席のかたちをとっている。

このサロンに出席することで、健常者は障害者をあらゆる角度からより深く理解し、また障害者は、他のちがった障害者を理解し、お互いの存在を認めあっている。また、介助をうける側とする側といった固定意識はなく、参加している人たちがみな仲間意識をもって交流している。

毎月開かれる定例サロンでは、障害者および健常者からだされたテーマについて、ときには講師を招いて討論が活発に行なわれる。そのときの模様は、機関紙『サロン・あべの』で報告され、参加できなかった人たちともいつも機関紙を通じて連絡しあっていて、いま大阪市でも暖かみのあるユニークサロンとして注目されている。

もうひとつ、京阪神版　賃貸情報マガジン（七月一六日号）では

大阪市阿倍野区に「障害者も、健常者も同じテーブルで話しあいましょう。そのテーブルから、きっと何かが生れてきます」と毎月第三土曜に〈サロン・あべの〉というテーブルを提供しているグループがある。

又、毎月の例会報告を兼ねて機関紙『サロン・あべの』を発行していると紹介されました。

ご紹介をしていただいて、新しい出会い、ふれあい、助けあいが生れることを楽しみにしています。

なんとかしてくれる

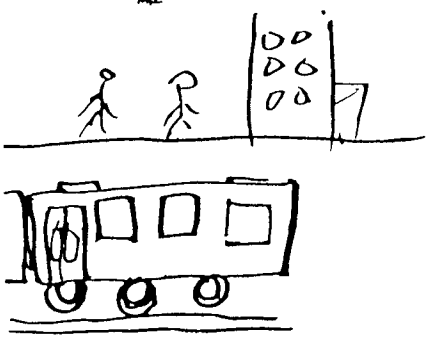
親切過剰

私は、ほとんど一人で外出します。車椅子なので、周りの人によく手伝ってもらいます。十人十色とはよく言ったもので、いろんな人がいます。例を上げる前に、親切な人が増えてきていると思います。私が言いたいのは、その点なんです。頼めば快く引き受けて戴けるのですが、有難うございましたと　言った後でもまだ、手伝ってくれるのです。あげくの果てには身元調べ、どうして、こんな体になったのとか、かわいそうにねとか。「そんなこと、なんの関係があるのん」と言いたくなります。

手伝ってもらいながらこんなこと思っている私は、罰当りなのでしょうか？（Y）

コミュニケーション拒否症候群 ④

上平幸雄



我が家の一人息子は、もうすぐ一才四か月になります。狭い家の中を走り回っては、何かまだ言葉にはならないのですが、懸命に話しかけてきてくれます。身振り手振りや、表情まで使って、何かを伝えようとしています。ついこの間まで、泣くことでしか自分を表現できなかったことを思うと、すごい進歩です。

少しうるさく感じるときもありますが、できるだけ子供の話を聞いてあげるようにしています。これから、一つ一つの言葉を覚え、またその使い方を覚えて行く上で、逆に、おとな達も正しい言葉を使うように気を付けなければなりません。

国語は学校で教えてくれますが、日本語を誰かに教わったという日本人は普通いないと思います。変な言い方かもしれませんが、言葉による会話（コミュニケーション）というのは、人と会話することで自然に身につけて行くものだと思います。

子供のころに、おとなも子供も関係なく、ただ、どれだけたくさんの人の話を聞くことができたか。また、どれだけたくさんの人に自分の話を聞いてもらえたか。このことが将来、コミュニケーションを、円滑に行えるようになるかどうかの、最大のキーポイントになるような気がします。

そう考えてみると、ぼくのコミュニケーション下手もなんとなく理解できてきます。

十四才まで、ほとんど家の中にいて、学校へも行っていなかったぼくにとって、コミュニケーションの相手は家族だけでした。

その家族とのコミュニケーションも、ずっと家にいれば、生活に変化がないのですから、会話がなくなっていったと思います。朝から晩まで、テレビを見て過ごしていたことを思い出します。

在宅障害者がすべてそうとは言えませんが、家族以外の人と接する機会が少ないのは事実です。

どれだけたくさんの人と会って会話をしたかが、コミュニケーションの上達に影響を与えるとすれば、言語障害の有無以前の問題として在宅障害者にとっては、不利になってしまうのです。

障害者が街に出るためには、コミュニケーションができなければなりません。でも、街に出て人と話をしなければ、コミュニケーションも上達しないのです。

（おわり）

まちづくりのはなし（7）

第六話

なんでもかんでもできません

原田　仁

「まちづくりについてあなたのご意見をお聞かせください」というようなアンケートが来たらどのように答えますか。

この手のアンケートをして回答を送り返してくれる人は、だいたい半分くらい。まちづくりに積極的に参加していこうという人もあんまり多くはないんですね。

さて、本題のアンケートにどのように答えるか。日頃から不満に思っていることを書くわけですが、人間なんてもんはそんな時にそうそう他人のこととか、まち全体のことを考えて意見を言うのも難しいもので、自分にとって良いように書く。それをコンピューターでバチバチと集計して、市民の意見としてまちづくりに生かしていくわけです。

ところが、自分のことを中心に考えた意見ですから、バラバラなものの集まりです。例えば、道路の付け方一つにしても、歩行者、車に乗る人、障害者、商売をしている人、子ども、老人などなど、みんなそれぞれ違った意見がでてきて当然なんです。

こんなにたくさんの意見を全部満足させるのは無理かも知れません。そこで必要なのが、お互いの意見を聞いた上でどうしたら良いかを考えるということでしょう。自分のことだけでなく、気が付かなかったような他の人の話も聞いて、みんなが納得できるやり方を決める場、そういうところをつくっていきたいですね。

女性たちの抗議

先日、女子高校生コンクリート事件の初公判があった。いつもならそういう記事は、たんねんに読むのであるが、今回は読まなかった。あまりにも無惨で読む気がしなかったのである。

この事件については、受験競争の厳しさや家庭内での親の不在などが問題にされたが、当初からぼくが思ったのは、この背景には根深い「女性差別」があるのではないかということだった。女性をモノとしか見ない見方があるような気がした。最近は少しこの観点から、この事件を見ている新聞記事もでているようだ。

事件が起こった当初は、少年たちの母親を責めるような新聞や雑誌の記事ばかりが目立った。「女性」が男性によって殺されたのに、その非難はまた彼らの母親である「女性」に集中したような形になっていたのである。

人間の社会には、障害者差別や外国人差別、部落差別など多くの差別があるのだが、女性差別ほど根が深く、歴史の古いものはないのではないかと思う。

差別は根が深ければ深いほど、差別を差別と感じられなくなるものである。差別されている方も、それが当り前だと思いこみ、自分の受けている圧迫感や抑圧感を、理由もよくわからないままに引き受けてしまう

のだろうか。

このような差別は、時間がたつにつれて消えていくものだと信じたいが、残念ながら若い人たちの間でも差別は厳然として生きているようだ。

たとえば、結婚しましたという案内状を受け取ってみると、たいていは男性の名前が上にある。上にあるだけならまだいいが、女性の名前がひとまわり小さく印刷してあることがある。まるで男性の付属品のような感じを受ける。

新婚さんの表札をみても、やはり男性の大きな名前の横に、申し訳なさそうに女性の名前が「付けたして」ある。

また、ぼくはある大学の社会福祉学科の教員なのだが、女子学生が六割から八割を占めているのにもかかわらず、クラスの役員として選ばれるのは毎年男子学生だ。

ぼくの知人のひとりで、二十代後半の会社員がいるのだが、その会社では大部分の女性は結婚退職するのだという。彼女は毎日のように、なぜ結婚しないのか、恋人はいないのかと冷やかし半分で聞かれる。会社としては彼女を退職させたいという意図もあって、上司からも男性の同僚からも、そんな声を投げつけられるのである。しかし三十近くなって退職して、別の会社を捜すなどということは並み大抵のことではない。とうとう彼女はノイローゼ状態になってしまい、現在も精神科の治療を受けている。

しかし、このような状況のなかでも、日本の女性たちは少しずつ抗議の声を大きくしはじめたようだ。

まず最近、話題になっているのは、女性の身体の一部分や裸を強調した広告の告発である。旧来の「性の道徳」を問うという形で問題にしているのではなく、女性の人格性を無視して、あたかも女性の身体がモノであるかのように「利用」されていることを問題にしている。

また、大阪の御堂筋線に乗っていた女性が痴漢行為を注意したばかりに、しつこくつきまとわれて、最後には二人がかりで強姦されたという事件をめぐっての論議がある。犯人は捕まって、たしか数年の実刑を言い渡されたように記憶しているが、その刑があまりにも軽すぎると女性たちが抗議の集会を開いた。強姦は殺人と同じくらい重い罪だと彼らは主張する。

世間（ここでいう世間とは男性優位の世間である）は、このような女性に対する性的な暴力を軽く見すぎているというのが、彼らの主張であるが、それは正しいと思う。

女性へのそのような暴力は、未然に終ったものなら、ぼくのごく身近にいくつもある。未然に終らなかったものは、きっとぼくの耳にまでは届かないのかもしれない。

こういう状況にあって、女性党首ひきいる政党が選挙で大きな勝利を得たことは印象的だった。サロン紙に特定政党の応援をするようなことを書いては良くないと思うので、あえてその政党の名前は出さないが、あの勝利は、その政党が支持されたのではなく、あの女性党首が支持されたのだとぼくは信じている。

オバタリアンの反乱などと、一部の週刊誌は驚くほど中立性を欠いて与党の側に立っているようだが、ぼくに言わせれば「反乱」は遅すぎたほどである。若い女性が書物の理論を頼りに女性の人権を主張しても迫力がない。やはり顔にシワのひとつやふたつある女性でなければ、いまのふんぞりかえったオジサン連中を討ち負かすことなど到底できないのである。

女性の政治家が増え、女性が総理大臣になれば、日本もきっと良いように変わると思う。多くの人が参加すればするほど、良い政治が行われるというのが、民主主義の発想の原点なのだから。

（知）

∞ サロン・あべの紙の
朗読テープが出来ました ∞

「阿倍野区ボランティア連絡協議会」の朗読グループのご協力により、サロン・あべの紙の録音テープを作っていただいています。

ご希望の方は、空テープをお送り下さいダビングをしてご返送します。（送料は自己負担して下さい）

旭　純子

ろうあ運動の現況

五．今後の課題（2）

ろうあ運動の歴史はまさに戦後の福祉思想の変遷、障害者運動の発展と共にあったと言えるが、今後の運動はろうあ者、通訳者のみの運動でなく、障害者運動としての連帯のもとに市民運動への拡大を行う必要があろう。

筆者は「アイラブパンフ普及運動」の片隅で活動中であるが、その中で考えることがある。それは今の運動が健聴者への普及に偏りすぎて、ろう以外の障害者への普及を怠りがちなのではないかということである。一般市民への普及を通じてろうあ者理解を促進するという一方で、障害者運動との連帯という観点から、盲、肢体、内部障害者や精神薄弱者、その関係者への普及をもっと推進する必要を感じるのである。それは筆者自身が、盲、ろう、肢体障害者交流サロンの運営委員として活動する中で、彼らが障害者であるという共通点を持ちながら、実際には自身の障害と同じ障害を有する人々同士の交流しか持たず、違う障害を有する人々に関しては、お互いのニーズ、障害の困難性をほとんど理解していない事実がわかるにつれ、その必要性を感じるようになったのである。「肢体障害者にとっては道路の段差の存在は危険であるが盲にとってはそれがないと歩道と車道の区別がつかず、却って危険である」「ろうあ者と盲人が通訳無しでコミュニケートする方法」など、ニーズの違いから生じる問題点を考えることが、異なった障害を持つ人々の相互理解を深めることにつながると信じている、その意味で「アイラブパンフ普及運動」はろうあ運動を障害者運動の中に位置づけ連帯を図るという役割を持つのではなかろうか。今後、点字版パンフ、朗読テープ作成により、運動の推進を図りたいと考えている。

障害者運動の推進課題は

一．全障害者が人としての生活を保障されるための総合的統一運動を全国規模に広げること

二．国民的社会保障闘争との結合

三．福祉施策、社会保障制度の学習

を必要とすると考えられるが、ろうあ運動もこの方向に従って展開する必要があると思われる。

「くつ」

中野君江

私が靴をはかなくなったのは、何年前かしら、いやもう何十年にもなる。一人っ子でありながら活発な娘でＯＬ時代も、ソフトボールをして名高いものだったのに、よもや病魔におかされる半生を送るとは思いもよりませんでした。結婚してすぐ長男に恵まれ、育児に幼稚園にと活動し、子供の服は全部手作り。二男にも同じ様な生活を送った。主人の会社の事、父母との同居など、過労がもとで発病。そこでゆっくり治療すればよかったのに、二人の子供に無理をして日常生活をする。二男が高校二年生の頃から再発し、足の変形が急進行し靴がはけなくなり出した。一家の主婦は外出しないわけに行かず女性用のヘップをはいて百貨店でもどこへでも出かけた。店員さんに足元を見られ市場行きと違うと言わん顔。

靴がはきたい、はきたいと何度思った事か。幅広の靴を買って来て今度こそ自分の足になれるのを願っても二、三度はくがどうも痛くてはきにくく下駄箱に三、四足並んでいて、うらめしく眺めている。高価なお金を出していて身につかない悲しさ。足のひふが弱くすぐはれ上るし、底豆が出来て痛むし、はく時左足首が曲がらないので上手にはけないので、ついすぐはける男物ヘップを愛用している有様。だから、ヘップの底厚のものがあると余分に買い置きしておく。それでも自分の足で行きたいところへ自由に行け、おいしいものも買ってこれる、たのしさを心から感謝しています。健常者から見れば、不かっこうな姿でも、靴がはけなくてもいゝの、このまゝ病状の進行する事なく、どこへでもとことこ遊び歩けます様にと願っています。

●●●●●●●●●●●●●●●●●●●●

＃感謝します＃

カンパ・はがき・バザー用物品など、ご協力ありがとうございました。

お礼を申し上げます。

七月のカンパ合計三〇〇〇円

上田敏・金岡千恵子・高尾澄男・町野旬子・丸山寿美子・山本敏子・匿名三名。

（敬称略）

＜サロン・あべの＞第３８号

発行日　平成　元年　８月１５日（日）

発行・編集＜サロン・あべの＞運営委員会

［大阪市阿倍野区阪南町6-3-26

電話(06)691-1028冨田慶子］

印刷　セルフ社　電話（06)691-2365

［阿倍野区西田辺２－２－１０

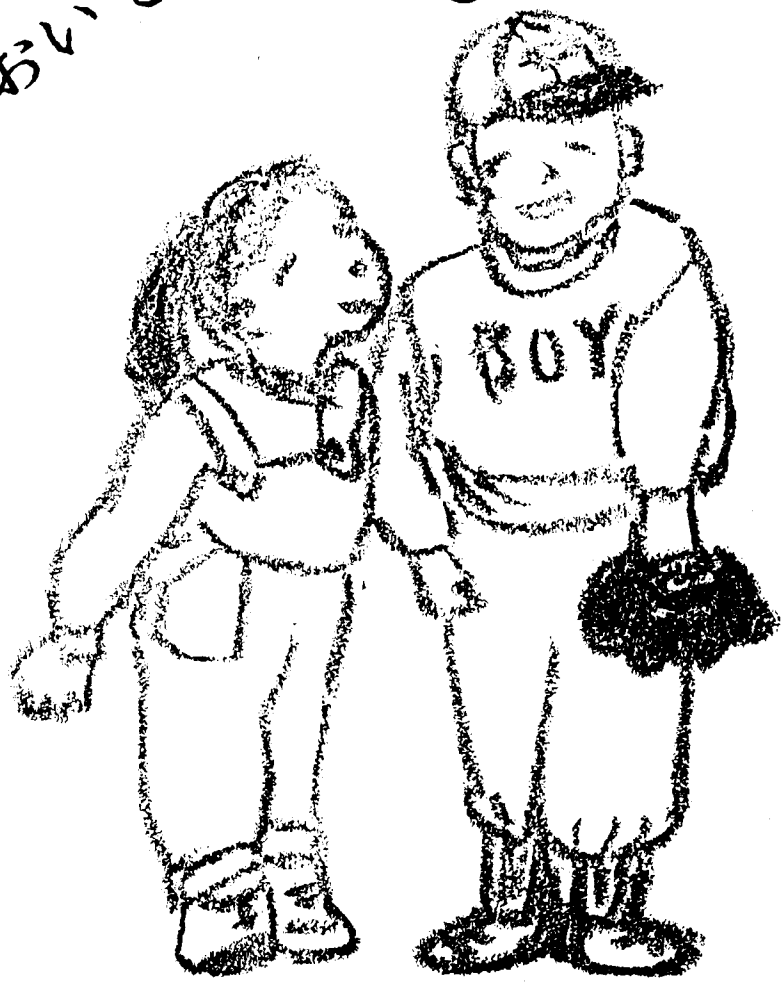
グレース鶴ヶ丘１０１号］

定価　￥６２.

編集後記

人がおっしゃることを聞き、考えを聞き、そうかーそんなこともあるんか、そんな考えもあるんやな。──あなたが主役──のサロンあべのの井戸端会議は楽しかった。やっぱり「私の一番好きなものは人。人間や。その人その人の個性があって、いつお会いしても飽きない。大好きである」と主役のひとり。（石）

＜サロン・あべの＞9月の
出会いにぜひおいで下さい！



テーマ:『地域とコミュニケーション』

講師：大阪府立大学 社会福祉学部 助教授 定藤丈弘氏

平成元年9月16日（土）午後1時
育徳コミュニティセンター　研修室

＜サロン・あべの＞運営委員会　連絡先：冨田慶子　大阪市阿倍野区阪南町6－3－26　☎06－691－1028